

小学校低学年を主に 対象としたプログラム



この時期の児童は、具体的な活動や体験を通してイメージを膨らませ、遊びを工夫すると同時に、環境への接し方を身に付けていきます。例えば、こんな様子は見られないでしょうか。

遊び場の環境や、その場にある小石や木の枝などを利用して、遊びを発展させる。

落ち葉や小石などからイメージを膨らませ、加工して遊ぶ物や飾りを作る。
初めて接する生き物でも、何度も触れているうちに接し方が上手になる。

この時期の児童には、具体的な体験を通して得た気づきを次の活動に生かすということを繰り返しながら、自然や環境に対するイメージを膨らませたり、接し方を身に付けたりする特性があるということが出来ます。そこで、児童が同じ対象と繰り返し触れ合う場を設定し、試行錯誤しながら自然環境や事象に対する感受性や興味・関心を高めるとともに、自然のすばらしさや生命の大切さを感じ得るように配慮したいものです。その際、遊びや生活に使う簡単な物を、道具を用いて製作し、その楽しさを体験できるようにするとともに、物や道具への接し方や扱い方、その有用性に気付くようにすることも大切です。また、衣・食・住などの環境に接する基本的な態度や習慣については、家庭とも連携を図り、具体的場面を通して体得するようにしたいものです。

目 次

生き物を育てよう 	28
たねの不思議 	32
身近な物で音を出そう 	36
土で遊ぼう 	40
野菜を育てよう  	44

生き物を育てよう

時期 春～夏

時間 3時間

場所 学校（教室）、家庭

- 身の回りの生き物を見つけたり、飼育したりする。
- 生き物に合ったすみかを調べたり、考えたりする。

ねらい

親しむ ・身近な生き物を採集して育てる活動を通して、積極的に生き物に触れようとしたり、愛情をもって生き物に接したりする態度を育てる。

活動展開例 第1学年 生活「いちねんせいになったよ ～がっこうたんけんに しゅっぱつだ～」

準備物	・虫かご ・水そう ・ポリ容器 ・石 ・砂 ・小石 ・小枝 ・エアポンプ ・エアフィルター ・生き物の餌 など		
	時間	活動内容	留意点
展開	5分	○どんな生き物がいるのかを予想する。	・どんな生き物がいるかを予想してから出かけることで、見通しをもって活動できるようにする。
	40分	○生き物探しに出かける。	・持ち物や活動上の注意点を確認し、安全に活動できるようにする。
	45分	○見つけた生き物の育て方を調べながら育てる。 ・生き物の育て方を本や図鑑で調べてみたり、生き物に詳しい人に聞いたりする。	・命の大切さを道徳の時間〔内容3－(2)〕と関連付けて考えさせていき、責任をもって飼育していこうとする意識やよりよい育て方を調べようとする意欲を高めていけるようにする。
	45分	○調べたことや見つけた場所を思い出しながら、かごや水槽に生き物のすみかを作る。	・餌だけではなく、生き物にとってのよりよい環境を考えていけるように助言し、生き物と環境の関わりに目を向けられるようにする。
	事後	○生き物の様子を継続的に観察し、紹介し合う。	・自分が育てている生き物の情報交換を行い、他の生き物にも目を向けていけるようにする。 ・様々な生き物に触れたり様子を知ったりできる環境を整えていき、それぞれの生き物の環境に合ったすみかを考えられるようにする。また、そのことが身の回りの自然環境を見直すきっかけになるようにする。

低学年



活用ガイド

○ワンポイントアドバイス

- ・自分が見つけてきた生き物を飼育していくことで、愛着をもって関わられるようにする。
- ・個別の飼育活動で終わることのないよう、学級や学年で「生き物コーナー」などを設置する。そうすることで、多様な生き物に触れることができるようにするとともに、児童相互の積極的な交流を促す。
- ・情報交換のための掲示コーナーを設置し、互いの生き物の様子を記録したカードや写真などを掲示できるようにすることで、生き物への興味・関心を高めるきっかけにする。

○活動の様子

低学年



校庭の隅の方にこんなにたくさん
ダンゴムシがいるんだね。
暗い場所が好きなのかな。

土は足りているかな。
葉っぱや小枝を一緒に入れてあげると
かくれるところができるね。



○発展

- ・身近な生き物の飼育活動を、生活科の小動物の飼育へとつなげていくことが考えられる。また、小動物と合わせた生き物コーナーを設置していくと、飼育活動への子どもの思いを高めていくことができる。
- ・道徳の時間〔内容3－(2)〕と本活動を関連付けると、より効果的である。
- ・総合的な学習の時間と関連させ、ビオトープ作りなどを行うことも考えられる。

○活動にあたって参考となる文献

- ・木村 義志 「学校で飼う身近な生き物―飼い方観察完全ガイド1～8」 学習研究社（2007）
- ・木村 義志 「机の上で飼える小さな生き物」 草思社（1999）

育てる生き物の例

ザリガニを育てよう

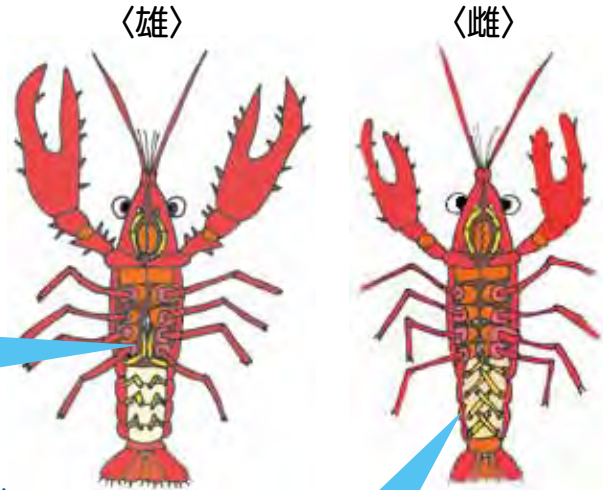
○ザリガニを育てるのに必要なものの例

飼育用の水槽（水槽以外にも形状の似たガラスの容器やプラスチックの容器などでの代替も可能）
 エアーポンプ
 ザリガニが隠れる物（石、植木鉢のかげら、小枝などを組み合わせて置く）
 水草
 石

○ザリガニのエサの例

市販の専用飼料
 スルメ
 煮干し など

雄は、雌に比べて
 はさみが大きい。
 この部分の脚（生殖器）が
 長くなっている。



○ザリガニを飼育する水槽の中の様子の例



○育てる時の注意点

- ・ 共食いに気を付ける。
 - ➡ 同じ水槽に2～3匹程度までの飼育とする（水槽の大きさによって違う）。
 - ➡ ザリガニが隠れられる場所を作る。
- ・ 気温や室温に気を付ける。
 - ➡ 室温と水温の差が大きくなるようにする（水温が適温になっていても、室温が低いと命を保つことが難しい）。
- ・ 小動物と一緒に飼わない。
 - ➡ 生きた小動物（メダカ・ドジョウ・ヤゴなど）と一緒に飼うと食べてしまうので気を付ける。

低学年



ダンゴムシを育てよう

○ダンゴムシを育てるのに必要なものの例

飼育ケース（ペットボトルを使用することも可能）
土（ダンゴムシを採取してきたところの土）
小石やコンクリートのかけら

○ダンゴムシのエサの例

枯れ葉や落ち葉
キャベツやキュウリなどの野菜
魚粉
チーズ など（いろいろなものを食べる）

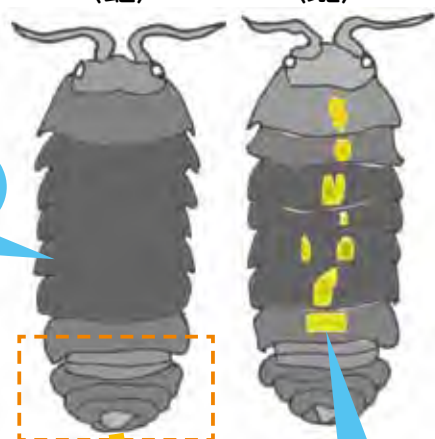
雄は、全体が黒色で、
背中の斑点が少ない。

○ダンゴムシを飼育する容器中の様子

コンクリートのかけらを入
れる（エサになる）。

〈雄〉

〈雌〉



雌は、
背中の斑点が、
雄よりもはっきり
している。



背中の斑点の違いが
はっきり分らない場合は、
尾に近い部分を腹側
（脚がついている側）から見るとよい。
雄には、2本の生殖器がある。

○育てる時の注意点

- ・ もとの環境になるべく近い状態で育てる。
→ダンゴムシを採取したときに、その場の土と一緒に採取して飼育容器の底に敷くようにする。
- ・ 共食いに気を付ける（親が子どもを食べることが多い）。
→成虫と幼虫は別々の飼育ケースで飼う。
→メスの腹側が黄色っぽく膨らんでいたら、この時点で別の容器に移す。
- ・ カルシウムの補給ができるようにする。
→小さい時は頻繁に脱皮するのでコンクリートのかけらや小石を入れておくとよい。
- ・ 飼育容器を清潔にする。
→飼育容器やその周辺の衛生を保つために、餌はこまめに取り換える。
- ・ 土の乾燥を防ぐ。
→霧吹きなどで土に湿り気を与える。

低学年



たねの不思議

時 期	秋
時 間	2 時間
場 所	校庭、公園、野原

○いろいろなたねを見つけ、それぞれが違った特徴をもっていることに気付く。

ねらい

- 親しむ** ・体験を通して、身近な自然への興味・関心を育てる。
- 知 る** ・様々なたねの形や性質のおもしろさを知り、さらに積極的に探したり、そのしくみを調べたりしようとする態度を育てる。

活動展開例 第1学年 生活「あきってきもちがいいね」

低学年



準備物	・軍手 ・たねを収集するためのポリ袋 ・水筒（必要に応じて）		
展 開	時 間	活 動 内 容	留 意 点
	10分	○様々な植物のたねを見つけに、校庭、公園や野原などに出かける。	・たねを採取できる場所を事前に調査しておく。
	20分	○いろいろな「たねさがし」をする。	・児童の安全に気を付ける。
	20分	○集めたたねをなかま分けする。 ・くつつきたね（通称「ひつつきむし」） （オオオナモミ・センダングサ類・チカラシバ等） ・転がるたね （トチノキ・ドングリ類・ツバキ・チャノキ等） ・風で飛ぶたね （ススキ・セイタカアワダチソウ・カエデ類・ユリノキ・ハナツクバネウツギ・イヌシデ等）	・児童の状態を見て、適宜休憩をとるようにする。 ・どんなものがたねであるかを考えさせたり、教師から紹介したりして、どんなものを探すかを理解させてから探しに行かせる。 ・危険な虫に注意する。
	20分	○見つけたたねの性質を使って遊ぶ。 （洋服につける、滑り台で転がす、高いところから飛ばす等）	・カエデ類等の樹木のたねの飛ばし方は、教師が紹介する。 ・たねの性質のおもしろさに気付けるよう適宜助言をする。
	20分	○学校に戻り、気付いたことや、もっとやりたいこと（たねの性質を使って遊ぶゲームなど）を話し合う。	※シャボン玉のできるたねがあれば、遊び方を紹介するとよい（ムクロジやエゴノキ等）。

活用ガイド

○参考(遊べるたね)

・くつつたね



オナモミ類…布に的をかねて、ダーツにして遊べる。

オナモミ類・センダングサ類・チカラシバ等…多くのたねを使えば、布につけて絵が描ける。

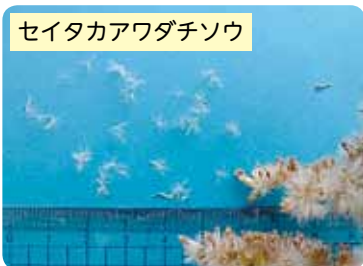
・転がるたね



転がりやすいたねは、転がして遊ぶ迷路やコリントゲームなどで遊ぶことができる。

ドングリ類は、楊枝をさすとドングリごまになる。

・風に乗って飛ぶたね・回転しながら落ちるたね



ススキ等綿毛を持つたねは、息で吹いて飛ばして遊べる。どこまで飛ばせるか競争するのも楽しい。

翼を持つたねは、高いところから落として、誰がゆっくり落とせるかを競争すると楽しい。また、カエデ類のたねに落ち方を似せたおもちゃ (P63参照) を作って遊ぶのも楽しい。アオギリは、ステージの上など、少し高いところから落とすとよい。



低学年



○活動の様子



よく転がるよ。振るとからから音がするドングリと、音がしないドングリがあるよ。音がしないドングリの方が早く転がったよ。

くるくる回りながら落ちるよ。いっせーの、せっ！



軍手についたたねで顔を作ったよ。



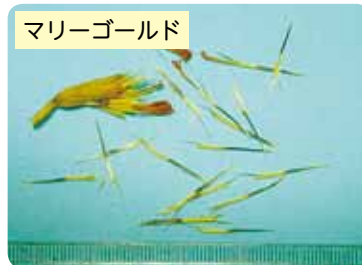
足にもついたよ。かわいいでしょ。



○発展

その他、いろいろな種子を紹介する。これらは3年理科「植物の一生」で、発展学習として扱うとよい。

・いろいろな種子（色、模様、形、大きさが様々であるところに着目させる）



・シャボン玉のできるたね



・いろいろな種子…接触でとぶたね（ホウセンカ・スマレ・カタバミ等）
アリに運ばれるたね（スマレ・カタクリ等）

○他教科・領域等での活用

- ・第3学年 理科 「植物の一生」
- ・第1・2学年 道徳 「がんばれポポ」〔内容1－(2)〕

サポニンという物質が含まれているので、水にひたすと泡立つ。

低学年



本プログラムの作成において参考とした文献

- 多田 多恵子 「身近な草木の実とタネ ハンドブック」 文一総合出版（2010）
- 多田 多恵子 「身近な植物に発見！ 種子^{タネ}たちの知恵」 日本放送出版協会（2008）
- 多田 多恵子 「花のたね・木の実のちえ① タンポポのわたげ」 偕成社（2008）
「花のたね・木の実のちえ② スミレとアリ」 偕成社（2008）
「花のたね・木の実のちえ③ モミジのつばさ」 偕成社（2008）
「花のたね・木の実のちえ④ ドングリとリス」 偕成社（2008）
「花のたね・木の実のちえ⑤ オナモミのとげ」 偕成社（2008）
- 小林 正明 「花からたねへ」 全国農村教育協会（2007）
- 高森 登志夫 「たねのずかん ●とぶ・はじける・くつつく●」 福音館書店（1990）
- 「第38回企画展 とんダネ・ついタネ・およいダネ ～種子の不思議を科学する～」
ミュージアムパーク茨城自然博物館（2006）

施設紹介

- 根本山自然観察センター
季節、滞在予定時間、人数、年齢構成に応じた活動を、センターの自然観察指導員から提案していた
だけの。自然観察の際には、自然観察指導員にガイドを頼むことができる。
入館並びに各プログラムの体験はすべて無料。
開館時間：午前9時～午後4時
休館日：月曜日（月曜日が祝日の場合は開館）、祝日の翌日、年末年始
〒321-4311 真岡市根本56-11
TEL 0285-83-6280 FAX 0285-83-4624

低学年



身近な物で音を出そう

時期 いつでも

時間 1時間

場所 教室

○身近な素材を組み合わせて音の出る物を作り，たたく，破る，振るなどの方法で音を出す。

ねらい

親しむ ・いろいろな素材やその組合せから，さまざまな音が出ることに興味をもち，身近な音に対する興味・関心を高める。

活動展開例 第1学年 音楽 「おんがくづくりをたのしもう」

準備物	音が出る物（ペットボトル，缶，瓶，カップ，ビーズ，豆類，ティッシュペーパーの箱，輪ゴム，新聞紙，割り箸，棒，ストロー，水，砂 など）		
	時間	活動内容	留意点
展開	事前	○音が出る物（素材）を用意する。	・家庭に協力を呼びかけて一定期間を設け，音が出る物を集めておく。
	10分	○よい音を聞いた経験を思い出す。 ○教師の出す音がどんな音か，聞く。 ・小さな音と大きな音 ・気持ちのよい音といやな音 ・自然の音（効果音CDの活用）	・よく聞かないと聞き取れない小さな音や，同じ素材でも大きな音と小さな音が出ることを実演する。自然の素材（水，砂，木）を準備できるとよい。
	20分	○身の回りのもので，気持ちのよい音が作れることを知り，グループごとに物を使って，いろいろな音を出す。	・こする，ぶつける，はじく，振る，たたく，破るなど，同じ素材でもいろいろなやり方を試してみるよう助言する。
	10分	○どのような音が作れたか，グループごとに発表する。	・同じ音でも人によって感じ方が違うことに気付かせる。
	5分	○身の回りにどんな音があるか考える。	・何がどんな音を出すかまで考えることで，心地よい自然の音（風，川，虫や鳥の鳴き声）や季節を感じる音，うるさく感じる工事や車の音，話し声などがあることに気付かせる。

低学年



活用ガイド

○活動の様子

水や木は、
やさしい音がして、気持ちがいいよ。



「やってみたい」と、水や木の棒で音を出しているところ。でんでん太鼓を自作して持ってきた児童もいた。



ペットボトルやカップの中に入れるものを工夫して、音を作っている様子。



いろいろな音の出る楽器

○ワンポイントアドバイス

- ・児童の多くは、日常生活において、あまり周囲の音に注意を払っていない。そこで、活動に入る前に音当てクイズ（材料を隠して音を出したり学校内の音を録音して聞かせたりする）をして、音に対する意識を高めるのもよい。
- ・木の棒は、太さや長さの組合せやたたく強さで手軽に音の違いが分かるので、実演するのに効果的である。

○実施した効果(活動を振り返って)

- ・児童によい音を聞いた経験を聞いてみると、「川でバーベキューをしたとき」「海で砂遊びをしたとき」などの音が発表され、楽しかった思い出とともに音が記憶されていた。
- ・当初は、グループ単位にして、音を比べながら活動を進めるよう計画していたが、ほとんどの児童が「楽器づくり」に熱中していた。そこで、音の出し方を発見する（楽器を作る）活動は個人の活動とし、できた音を聞き比べるのはグループ内での発表としてもよいだろう。
- ・児童が作る楽器は、ペットボトルや缶、カップなどを利用して、振って音を出すものが多かった。そこで、発表の際、振り方や中に入れる素材の違いで音が変わること気付けるよう、音の出し方などを助言した。
- ・本活動終了後、「砂がいっぱいのところに、大きい石を落とすと、『シャ』と音がした。」「ブランコに乗っているとき、『ギゴギゴー』となった。」「鉄棒をはたいてみた。」「石と石をこすったら、『カシャカシャ』と音がした。」など、校庭で進んで音を見つけるようになった。

低学年



○他教科, 領域等での活用

- ・第1学年 生活 「きのみであそぼう」
- ・第2学年 音楽 「がっきランドをたんけんしよう」「虫のこえ」

○発展

- ・今回の活動によって、普段何気なく聞いている音にも関心を払う児童が増えると考えられる。さらに、「大きな音」「小さな音」、「よい音」「いやな音」などにも関心を向けさせ、よりよい環境を保つために「音」が関係していることに気付かせていきたい。
- ・人によって音についての感じ方が違うことから、時と場に応じて周りを考えて話をしたり、静かにしたりするという態度にもつなげていきたい。

○音の大きさを調べる機器

音の大きさを調べる「騒音計」という機器がある。学校によっては、家庭科や保健室にある場合もあるので探してみるとよい。騒音測定は、環境評価の重要な測定項目となっている。



低学年



○活動にあたって参考となる文献やWebサイト

- ・細田 淳子 「わくわく音遊びでかんたん発表会」 鈴木出版（2006）
- ・「NHKクリエイティブ・ライブラリー 素材をさがすー音楽・効果音」 NHK
<http://www.nhk.or.jp/creative/>
 このサイトは、NHKアーカイブスの番組や番組素材から切り出した映像や音声を、視聴者の表現・創作活動に利用してもらうための「創作用素材」として、インターネットを通じて提供する無料のサービスである。

土で遊ぼう

時期 夏

時間 2時間

場所 校庭

○砂場や土の山などを使って、山や川、湖などを作る。

○砂鉄やさらさらの砂、お気に入りの石などを集める。

ねらい

親しむ

・実際に土に触ったり土で遊んだりすることで、「土」「石」など自然素材への興味・関心を高め、豊かな感性を養う。

活動展開例 第1学年 生活 「しぜんとあそぼう」

準備物	・スコップ ・シャベル ・じょうろ ・ペットボトル ・ポリ袋 ・カップ ・磁石 ・ふるい ・タオル ・ビーチサンダル ・着替えや水着（必要に応じて）		
展 開	時 間	活 動 内 容	留 意 点
	事 前	○給食のカップを洗ってとっておく。 ○何をして遊びたいか考えておく。	・自分の活動に必要なものを考えさせ、自分で準備させる。
	10分	○活動内容、持ち物、約束を確認する。	・活動内容によっては、児童の服装（半ズボン、水着、ビーチサンダル）に配慮する。
	50分	○砂場や校庭の隅などで土を集めて遊ぶ。 または土のある場所へ行き、土で遊ぶ。 ・砂山づくり ・砂山くずし ・川、湖づくり ・迷路づくり ・穴掘り ・文字当てクイズ ・泥団子づくり ・泥投げ ・砂鉄集め ・さら砂づくり ・石並べ ・お気に入りの石見つけ（光る石、色の付いた石、平らな石、おもしろい形の石など）	・児童の状態を見て、適宜休憩をとるようにする。 ・土や砂、石などとの触れ合いを中心とするが、水、棒、草花なども組み合わせると、ダイナミックで豊かな活動になる。 ・多人数で遊べる活動については、全員で仕事を分担して取り組むのも楽しい。
	15分	○集めた物、できたものを見せ合う。	
	15分	○土を元に戻したり、使った道具やカップなどを片付けたりする。	・砂や土を元に戻したり、使った道具を適切に片付けたりするようにする。

低学年



活用ガイド

○遊び方の例

- ・砂場で川，湖，滝を作る。
- ・穴を掘って水をためる。足をうめる。
- ・砂山を作って，棒倒しやトンネル掘りをする。
- ・ぬれた砂山にかわいたさらさらの砂をかける。
- ・土に堅い棒やくぎなどで文字を書き，それを埋めて，書いた文字を当てっこする。
- ・お気に入りの石に名前をつける。
- ・石に色を塗ったり文字を書いたりする。
- ・カップで型をとり，並べる。

○活動の様子

わあ，手がつながったよ！



そおっとやさしく掘って，トンネル完成！
お友達と掘ると，うれしさ2倍。

ペットボトルを置いておけば，
どんどん流れていくよ。



川作りから滝を思いついたよ。水と砂が，滝つぼに落ちていくのが楽しい！



つめたい「足湯」でかきごおりを食べている・・・
つまり。



赤い石やつるつるの石，三角の石があり，ユニークな名前をつけて楽しんだ。

※第1学年国語「こんな石をみつけたよ」(光村図書)の学習の際に収集した石を活用した。

低学年



○ワンポイントアドバイス

- ・砂場がある場合には、そこを拠点に活動を組み立てるとよい。
- ・各自でペットボトルを準備しておくとし、水を使う際に便利である。
- ・砂鉄を収集するときには、ジップ式のポリ袋などに磁石を入れて行うとよい。
- ・プラスチック製のスコップ（大）を使用すると、けがの心配がなく安心である。
- ・一度に数種類の活動を実施するのは難しいので、1時間は砂場で遊び、1時間は砂鉄や石見つけをするというように分けてもよい。また、全部活動するのではなく、児童の実態や確保できる時間に応じて内容を選択して実施するとよい。

○実施した効果(活動を振り返って)

- ・砂場で活動したので、砂を使って山や川を作ったり穴を掘ってその中に足を入れて遊んだりとし、生き生きと活動できた。
- ・道具や材料が充分かどうか心配だったが、児童は、砂や石という自然素材の特徴を生かし、喜んで活動していた。
- ・児童が書いた活動の記録には、「すなを てにかけたのが、たのしかったです。」「みずを やまのはんぶんにかけたら、しろくろのやまができました。」「ちっちゃいきらきらのいしがありました。」「うみをつくってはいたら、つめたかったです。」「つちは、なんでもつくれるとおもいました。」などの記述があった。土に関して、さまざまな発見や感動が期待できる活動である。

○他教科、領域等での活用

- ・第1学年 図画工作「しぜんとなかよし」

○発展

- ・穴を掘ったとき、表面の土と奥の土の手触りや温度の違いに気付かせていきたい。
- ・場所や深さによって土の感触（さらさら、粘土質）や土の色が違ふことに気付くことや、水を含ませることで感触が変わったり固まったりすることにも気付かせると活動が深まる。

○保護者への啓発や広報

- ・夏休み前に活動を実施し、学年だよりなどで保護者に活動の様子を知らせて、夏休みにも土を使った活動を奨励するとよい。

○活動にあたって参考となる文献

- ・中村 真一郎 「土の絵本〈1〉土とあそぼう」 日本土壤肥料学会 （2002）
- ・佐々木 達行 「土を素材とした学習－図工科・造形遊びからの展開」
筑波大学附属小学校「授業公開シリーズ」（1990）

低学年



つち

土であそぼう

ねん くみ ばん なまえ

☆ やってみたいことは どんなことかな？
えや ことばで かいてみよう。

☆ つかう どうぐやざいりょうは なにかな？

☆ ぜんいんが もってくる もの

☆ ^{つち}土あそびを やる^ひ日
 ^{がつ}月 ^{にち}日 ()

◇ この^ひ日までに おうちのひとと
 よういを しましょう。

低学年



野菜を育てよう

時 期 春～秋

時 間 19時間

場 所 教室, 教材園

- 自分が好きな野菜を選び、育てる。
- 世話をしながら野菜の成長の様子を継続観察する。
- 収穫の喜びを体感する。

ねらい

親しむ ・野菜の成長の様子に関心を持ち、すすんで大切に育てる意欲と態度を育てる。

活動展開例 第2学年 生活「やさいをそだてよう」

準備物	・野菜の苗（教材園用野菜，子どもが自分で育てたい野菜） ・鉢 ・土 ・スコップ ・じょうろ ・観察カード（時間ごとに記録できるもの）		
	時 間	活 動 内 容	留 意 点
展 開	1 時間	○どんな野菜を知っているか話し合う。 ○育ててみたい野菜について話し合う。 ・自分が育てたい野菜の種や苗の様子を調べる。	・野菜とその名前が一致するように，予想される野菜の苗や実，写真等を準備しておく。 - ミニトマト，ナス，ピーマン，キュウリ，オクラ，えだ豆，じゃがいも，落花生等
	1 時間	○野菜を育てるにはどんなことが必要か話し合う。	・野菜を育てるために大切な作業を考えさせる。 - 水やり，肥料，草取り
	2 時間	○野菜の苗を植える前に，畑と植木鉢の準備をする。	・教師と一緒に作業し，子どもたちの頑張りを賞賛し，今後の意欲へとつなげる。
	2 時間	・草取り，うね立て，もと肥等 ○育てたい野菜を植える。 ・種まきや苗植え，水やり	・教師が共に植えたり世話をしたりしながら，育てることの喜びを感じられるようにする。
	10 時間	○観察カードの活用の仕方を学ぶ。 ○野菜の世話・観察をする。 ・水やり ・草取り ・追肥 ・棒立て ○毎時間，成長の様子や変化を，絵や文字で記録する。	・子どもと一緒に野菜を観察したり水やり，草取り等の世話をしたりして，成長を共に喜ぶ。 ・野菜も自分と同じように成長し，変化していくことに気付かせる。 ・以前の野菜の様子（観察カード）と比較させ，変化したところを見つけられるようにする。
	2 時間	○野菜の収穫をする。 ・収穫した野菜を観察する。 ・収穫した野菜を食べる。	・野菜の成長と世話をしてきた喜びを，自分なりの方法で表現させる。
	1 時間	○活動を振り返る。 ・野菜の世話と成長の様子を振り返る。 ・ノートに感想等をまとめ発表する。	・これまでの記録（観察カードや記録写真）を整理しながら，その時々様子や気持ちを整理させる。

低学年



活用ガイド

○活動の様子



苗の植え方の説明を聞く



草取り



さつまいもの収穫



やきいも会

○ワンポイントアドバイス

- ・子どもに自由に育てたい野菜を選ばせ、育てていくことにより、興味・関心が持続し、子どもの思いや願いが反映される。
- ・教材園において学年全体で「さつまいも」や「じゃがいも」「さといも」「落花生」「トマト」等も植え、近隣の農業の専門家の指導・協力を得て育て、収穫時期ごとにそれぞれの野菜を食味体験できることが、子どもたちにとって魅力的であり、継続して世話をすることで大きな喜びが得られる。
- ・10月には「さつまいも」を収穫し、保護者と共に「やきいも会」を行い、1年生を招待して一緒に食べることで、1年生の次年度への意欲付けにつなげる。

○活動の広がり

- ・教材園で育て収穫した「さつまいも」は学校栄養士と相談の上、「さつまいもシチュー」「大学いも」「いかとさつまいもの揚げ煮」等、給食献立として全校生に食べてもらい、みんなに喜んでもらえることで、収穫の喜びがさらに高まると期待される。

○他教科、領域等での活用

- ・国語「作文」、図画工作「絵画」に活用できる。

○協力者

- ・近隣の農業の専門家 ・学校支援ボランティア ・保護者

○実施した効果(活動を振り返って)

- ・野菜を育てることで農家の方の苦勞を知ったり、野菜をはじめとする食べ物を大切にする心がもてるようになったり、調理する人を思いやったりするようになった。野菜を育てている祖父母の手伝いをしたいという児童も増えた。他の植物にも関心をもち、花の水やりを現在も熱心に行っている児童が多い。
- ・自分たちが苦勞して育てたものをいただく経験、同校の児童が育てた野菜を食材とした給食をいただく経験が、より身近に食を感じ、苦手だった野菜を食べられるようになったり、よりおいしく大事に食べたりすることにつながった。
- ・第2学年の生活科での野菜育ては、農家の方に直接指導を受けながらの活動だったので、その苦勞やすばらしさを大いに実感し、理解や関心を深めることができた。

本プログラムの作成において参考とした文献

○「わたしがそだてる くさばな いきもの ずかん」 青葉出版

○篠原 温 『遊んで学ぶ野菜の本5「ベランダは野菜畑」～おいしい野菜をつくろう～』

偕成社 (2001)

低学年

